



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

合 縁 AIEN KIEN 奇 縁

龍馬の実家は女が多い。祖母久、実母幸、3人の姉や継母伊與など、女丈夫である。父八平は婿養子であったというところもあるが、坂本家の女たちは生き生きとしている。中でも末姉乙女は龍馬と最も親しい仲であることは有名だ。

また、土佐での恋人と言われる平井加尾、江戸での千葉佐那、京女の妻お龍といったように龍馬の周りにはいつも龍馬を支える女たちがいる。龍馬にとって彼女たちはどんな存在だったのだろうか。

長姉千鶴から龍馬に宛てた手紙の一条に「御らの末は火中々々(ご覧になったら火の中にくべて燃やしてください)」とあるように、当時私信は残さない美徳があったと思われる。千鶴の手紙は手紙の後半が残っているが、お龍は龍馬亡き後、夫から来た手紙を「人に見せたくない」と、土佐で焼き捨てたという。ただ、慶応三(1867)年

坂本龍馬の周辺にはいつも女がいる。と言うと、それは言い過ぎだろうか。妻お龍の昔語りによると、龍馬は海援隊士の一人に「君は男振りがいいから女が惚れる。僕は男振りは悪いが矢張り(女が)惚れる」とからかったという。

惚れるということは、恋愛だけでなくいだろう。激動の幕末において、表舞台で動く男たちを女たちはしっかりと支えていた。互いに認め、情愛を交わすことは人間的な深みを生んでいくのではない。

心許した者との語らい展

Les femmes autour de RYOMA

女たち



五月二十八日付でお龍に宛てた龍馬の手紙一通が、京都・近江屋(井口家)に残った。

今回、その手紙を所蔵する京都国立博物館よりお借りして展示(前期)する。同館所蔵品からは寺田屋登勢(前期)や妹きみえ(後期)がお龍に宛てた手紙。井口家の妻のものを龍馬が使っていたという鏡(海獣葡萄鏡)も紹介させていただく。お龍に龍馬暗殺を告げる依頼状(伊藤九三書簡三吉慎蔵・印藤幸宛、慶応三年十二月二日と五日付)、龍馬の下げ緒と目抜きで作られたお龍の帯メヤ、平井加尾の懐剣など彼女たちにゆかりのものを紹介する。

また、北辰一刀流千葉定吉の長女佐那の資料は少ないが、佐那は文久三(1863)年八月十四日の乙女宛の龍馬の手紙に登場している。手紙を所蔵する北海道坂本龍馬記念館から複製をお借りすることができた。

※紹介する主な女性

- ①妻お龍 寺田屋登勢
- ②実家の家族 姉・千鶴、乙女、姪・春猪
- ③恋人 平井加尾、千葉佐那

※主な展示資料

- ①お龍宛龍馬書簡 お龍の帯メ
- ②寺田屋登勢書簡 薩摩藩伏見屋敷絵図
- ③伊藤九三書簡
- ④龍馬宛千鶴書簡 千鶴の懐剣、乙女の帯
- ⑤乙女宛龍馬書簡、春猪宛龍馬書簡
- ⑥平井加尾の懐剣、加尾と兄収一郎の往復書簡(写本)、龍馬寄せ書きの胴掛け



下関市立歴史博物館非公認キャラ たな力〜ル先生

関連企画

講演会

「龍馬とお龍 下関に残る愛のかたち」

■講師 田中 洋一氏(下関市立歴史博物館学芸員)

■日時 2019年8月3日(土)13:30~15:00

■会場 新館1Fホール

■定員 100人(無料、受付先着順)

担当学芸員によるギャラリートーク

①8月17日(土)14:00

②9月 7日(土)14:00特別ゲスト:岡上汎告氏

姉乙女の手紙には龍馬の心情が素直に出ており、妻に宛てた手紙には優しさがこぼれる。彼女たちに宛てた龍馬の手紙や遺品などを通じて、龍馬その人の魅力に及ぶことができれば幸いです。

京都国立博物館、城南宮(京都市)、下関市立歴史博物館、北海道坂本龍馬記念館、高知県立歴史民俗資料館、岡上汎告氏(南アルプス市)、平井家ほか皆様方に衷心より感謝申し上げます。

前田 由紀枝



会期
一部入替

前期 7月23日(火)~8月31日(土)・後期 9月1日(日)~9月25日(水)

「連続講演会」を 今年も開催します！

昨年度に引き続き、連続講演会を行います。今年度のテーマは「幕末キーパーソン―龍馬をめぐる人々―」です。

幕末期は外患内憂の激動期ですが、多くの魅力的な人物が活躍した時でもあります。そうした人物のうち、坂本龍馬と直接、間接に関わりのあった重要な人物5人を取りあげ、県内外の研究者にお話をいただきます。それぞれの「幕末キーパーソン」についての研究をすすめておられる第一人者の方から、お話をうかがうことができる貴重な機会です。多くの方のご参加をお待ちしております。

開催日	演題	講師 *敬称略
6月22日(土)	幕末期の徳川慶喜について ―山内容堂の存在も視野に入れて―	家近良樹 (大阪経済大学特別招聘教授)
8月24日(土)	木戸孝允 「藩」をこえた近代日本 ―坂本龍馬ら土佐との関係を交えて―	齊藤紅葉 (三重大学・大阪教育大学非常勤講師、 京都大学大学院法学研究科研究員)
10月26日(土)	坂本龍馬と西郷隆盛 ―薩長盟約の背景―	落合弘樹 (明治大学文学部教授)
12月14日(土)	勝海舟と龍馬をめぐる幕臣たち	樋口雄彦 (国立歴史民俗博物館教授)
令和2年 2月22日(土)	容堂の言葉 ―書状にみる政治観・人生観―	渡部 淳 (高知県立高知城歴史博物館館長)

● 場所 高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール

● 時間 各回とも13時30分～15時頃

● 対象 一般(概ね高校生以上)

● 定員 各回ともに100名(先着順)

● 申込方法 高知県立坂本龍馬記念館
までお電話・メール・FAXでお申し
込みください。

FAX・メールの場合は「お名前・ご
住所・電話番号」をお書きください。

メールの場合は件名に「連続講演会聴
講希望」とお書きください。

★当日は当館駐車場が混み合うため、桂
浜公園駐車場から当館までの無料送
迎タクシーを実施します(11時～17時
実施予定)。聴講される方は桂浜公園
駐車場をご利用ください。

★講演会を聴講される方には、無料観覧
券を進呈いたします。当日設置する受
付にてお申し出ください。

「御所をまもった土佐の士」展終了

平成30年度最後の企画展「御所をま
もった土佐の士―藩邸史料にみる警
衛の世界―」展が、平成31年3月2
日から年度を越えて4月21日まで開催
された。約一か月半という短い会期で
はあったが、多くの方に足を運んでい
ただいた。

本展は、館蔵(寄託含む)資料30
点に、個人から借用した3点を加え、
派手さはないが充実した内容の展示
となった。「土佐藩京都藩邸史料」か
ら選り出した16点の古文書を軸に内
容を構成し、第一章で治安が悪化し
た幕末の京都情勢、第二章で土佐藩
による御所警衛の実態、第三章で朝
廷政治・公家社会と武家による警衛
活動との関係、第四章で土佐藩の御
所警衛の終焉に伴う政治的な駆け引
きを取り上げた。

「警衛」という具体的なテーマを定
めたことで、特にその分野に関心
のある方からの反応は小さくなく、内
容について具体的な質問や指摘をい
ただくこともあった。本展のような
堅い内容にも一定の需要があること
を感じた。瑣末なテーマではあつて
も研究の「最前線」を企画展示とし
てアウトプットできたことが、本展
の大きな意義だったのではないかと
考えている。

一方、展示資料の多くを古文書が
占めたことで、一般の来館者にとつ

てやや敷居の高い展示内容となった感
は否めない。古文書に書かれる内容そ
のものに触れてもらいたいとの思いか
ら、ほぼすべての内容に現代語訳を付
けた。これをじっくり読めば、こちら
が伝えたい内容を理解してもらえるだ
ろうという思いがあったが、この工夫
に効果があったとは言い難い現実もし
ばしば見受けられた。

賛否あるかもしれないが、本展のよ
うな学術的色彩の強い内容も、歴史系
博物館のひとつの使命として積極的に
取り扱うことが必要ではないだろうか。
今回の反省点をふまえつつ、専門的な
内容を分かりやすく伝える企画展示を
今後考えていきたい。

高山 嘉明



展示風景の一部。展示台には所狭しと古文書が並んだ。

『研究紀要』創刊しました

この度、『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要』の創刊号が発行されました。本誌は、オーソドックスな名称に示されている通り、研究雑誌です。博物館に課された大きな使命に調査・研究があります。当館でもこれまで様々な調査・研究がおこなわれてきましたが、一方で、その成果を発表する媒体がないことが一つの大きな課題となっていました。昨年度新館がオープンして博物館としての機能が飛躍的に向上したのを機に、研究面でもより一層の充実を図らなければならぬという思いから、『研究紀要』創刊の運びとなりました。

執筆するのは、当館の学芸員です。守備範囲も興味関心の方向も異なりますが、それぞれの業務や活動の中で見つかった課題について、各自が専門性をもって掘り下げ、その成果を文章にまとめます。

創刊号は、企画展に関連した内容の論文が一本、今後当館の展示等の柱になると考えられる新収蔵資料の概要を示す資料紹介が二本、そして、新館オープンに伴う展示室の環境整備の記録と、教育普及事業の事例報告という二本の活動報告が揃い、早速多彩なラインナップとなりました。

今後、年一回定期的に発行します。日頃の調査・研究の成果を、専門的知見をもつて発表する場として大いに活用されることでしょう。そして、歴史系博物館が発行する研究雑誌として、一定の評価

が得られるよう努めなければなりません。今後、質量ともにさらに充実した誌面にしていくために、執筆者それぞれが努力を重ねる所存です。

研究誌ということで、非常に堅い内容ではありますが、展示等とは異なるアプローチから、当館でおこなわれる研究の最前線に触れることができます。今後はこの『飛騰』でも最新号の情報を中心に随時紹介していきたいと考えています。興味のある記事を見つけた際は、手にとって御味読いただければ幸いです。

なお、本誌は、全国の都道府県立図書館や、高知県内の公共図書館等でご覧いただけます。また、当館ミュージアムショップでの販売も予定していますので、機会がありましたら是非お買い求めください。

【創刊号目次】

〈論文〉

●幕末期土佐藩の清和院門警衛について（高山嘉明）

〈資料紹介〉

●新出龍馬書簡「慶応二年十二月四日 坂本権平家族一同宛」考（前田由紀枝）

●平成二十九年寄贈・坂本直関係資料について―概要と目録―（亀尾美香）

〈活動報告〉

●展示環境の改善に向けた取り組みについて―経過・対処・見通し―（三浦夏樹）

●教育普及事業「歴史新聞づくりに挑戦」（河村章代）

ISSN 2439-8061	
高知県立坂本龍馬記念館研究紀要	
創刊号	
論文	高山 嘉明 (1)
幕末期土佐藩の清和院門警衛について	
資料紹介	前田由紀枝 (17)
新出龍馬書簡「慶応二年十二月四日 坂本権平家族一同宛」考	
平成二十九年寄贈・坂本直関係資料について	亀尾 美香 (28)
――概要と目録――	
活動報告	三浦 夏樹 (38)
展示環境の改善に向けた取り組みについて	
――経過・対処・見通し――	
教育普及事業「歴史新聞づくりに挑戦」	河村 章代 (43)
2019.3	

創刊号表紙

一瞬で 命のやり取りを覚悟

(要約) 慶応二年八月一日の夜

先輩である高橋是之進ら三人と父、父と同年配の者の五人が、風呂屋からの帰りに、五条橋の橋下にある娯楽場へ立ち寄った時の話である。

揚弓場という小さい弓を用いる射的場で、五人でいっぴいになる程度の店だった。そこへ三人の若い侍が入ってきて、いっぴいになっていっているのを見ると舌打ちしながら出て行った。「土州だ、土州だ」と言っていた。なまりから会津藩士とすぐに分かった。遊び終わって外へ出て、河原から土手へ上がると、五条橋の欄干に腰を掛けていた先ほどの三人が、欄干を離れて向かってきた。「やるぞ。子どもはあぶない。いんじよれ(帰れ)」

高知の偉大な郷土史家であり、『坂本龍馬 海援隊始末記』や『龍馬のすべて』の著者である平尾道雄は、明治三十三(一九〇〇)年の生まれである。その自叙伝的な随想録『歴史の森』に興味深い話が載っている。

平尾の父は嘉永五(一八五二)年の生まれで、慶応二(一八六六)年に祖父の名代として、一五歳で足軽隊に編入し、京都警備に行った。収録されているのは、その時の体験を父から聞いた話である。紙面に限りがあるので要約して紹介する。

と高橋は年少者を帰らせ、会津藩の三人とすれ違いざまに激しい斬り合いとなった。年少者の二人は藩邸に走って帰り、しばらくすると高橋ら三人も帰ってきた。結末を聞くことができず、その日は就寝したが、年少者二人は結末が気になり、翌早朝、五条橋へ行った。すると、橋の下に一人の侍の死体がつむけになっていた。

以上が要約であるが、現代では考えられない事件で、これを読んだ時、幕末京都の空気感を感じた気がした。両者とも一瞬で命のやり取りを覚悟したのだ。

龍馬は豪胆な性格？

似たような事件が当館所蔵の土佐藩京都藩邸史料にも出てくる。こちらは、突然抜刀してきた他藩の者に対して、上手く対応した。藩から「取扱方行届候趣」により、褒美として、切米一石が増え、苗字も許され、格式も組外に昇進した。具体的には書かれてい

ないため、どのような「取り扱い」をしたかが分からないが、逃げることは許されないの、立ち向かったことは確かだ。

他にも藩邸史料には、祇園を六人の土佐藩士が歩いていると一人の男とすれ違い、最後尾を歩いていた細木繁馬が斬られる事件がある。他の五人が犯人を追いかけるも取り逃がしてしまい、詳細は不明である。

ただ歩いているだけでこんな事件に巻き込まれるのだから、全く気が抜けない時代だ。龍馬の行動を見ると、比較的不用心な印象を受けるし、暗殺直前には、何度か夜、幕臣の永井尚志を訪ねている。しかし、当然こういう事件を知らないはずがないので、余程豪胆な性格なのか、もしくは腕に自信があったのだろう。

時代の空気感Ⅱ 雰囲気

歴史を扱うドラマや漫画で、私が「これは面白い」と感じるものは、やはりこういう時代の空気感を表すのが上手い作品である。その筆頭は『三・一五』である。殺伐とした面だけではなく、江戸時代の日本の良さも感じさせる作品だった。私は常々博物館の展示も同じだと考えている。時代の空気感Ⅱ 雰囲気を手早く表すことができれば、より来館者の理解の助けになるのではないかと。なかなか理想的な展示はできていないが、今後も目標にしたいと考えている。



細木繁馬

龍馬の手紙

03

墨塗りの下には…

現在、坂本龍馬の書簡はほとんどが活字となり、書籍等で読むことができる。そのユニークな文体は活字で十分味わえるが、文字や筆運びなどは写真、もしくは当館で展示しているような真物や複製でなければ分からない。

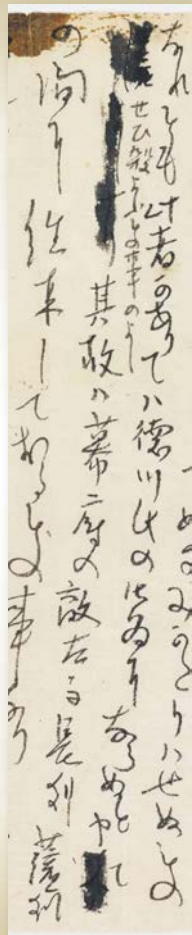
龍馬書簡には、墨塗り等で「直した」箇所がよく見られるが、実はその「直した」箇所には、単なる書き間違いの訂正と、推敲で直された箇所の二通りがある。特に「直した」箇所の多い慶応2年12月4日付権平・一同宛書簡では、断簡6枚中墨塗りが18箇所、四角で囲った箇所が1箇所あるが、大半が推敲の跡とみえる。家族宛の手紙で、いや家族宛だからなのか、随分な「りぐりよう」である（土佐弁の「りぐる」は「念を入れる」の意）。

例えば写真部分「徳川氏の御為にならぬと申…」に続く部分では、「来□□よしナリ」を墨で消し「てせひ殺よふとの事のよし」と右側に書き加えている。墨塗り部分が判読できないのが残念だが、比較できれば作文をしている龍馬の脳内を垣間見ることができるとも思えない。また、四角で囲った部分は「左馬助」を消し、「池蔵太」と書き直している。池内蔵太の変名「細川左馬之助」を書こうとしたが、土佐の家族には本名の方が通じると考えた、龍馬の思考回路にたどり着ける。

この書簡は従来写によって内容のみが知られていたが、近年原資料が見つかったことで、原文通りに写されていたことが判明した。加えて、活字化する過程においては「直した」文章を採用し、直す前の文言は大抵落とされてしまう。龍馬が「りぐって」文を直したことすら分からなくなってしまうのである。

くずし字をあまり読めなくても、じっくり画像で龍馬の文章を味わう。そういう機会をぜひ大切にしてみてはいかがだろうか。

亀尾 美香



私のおすすめ

No.3

『オーシャンビュー in 龍馬記念館』

ご来館されるお客様に「素晴らしい！」とおっしゃっていただけるのは、龍馬さんや幕末に関する資料だけではありません。それは高知が誇る豊かな自然、眼下に広がる太平洋！海は屋上や駐車場からもご覧いただけますが、今回は本館二階南側にある、「海の見える・ぎやうりい」からもう一つ階段を上がった場所「海を眺める休憩コーナー」をご紹介します。

テーブルと椅子を配したその場所は自動販売機も設置しており、ドリンクをお飲みいただけるながら、ゆっくりとお休みいただけるスペースです。目前には青く広い海。窓から目を落とすと、春には桜が満開となり、新緑の季節や夏には緑の葉や木々がまぶしい日差しをやわらげてくれる光景を見ることが出来ます。テーブルには龍馬さん宛てに手紙を書ける「拝啓龍馬殿」のコーナーも

あり、龍馬さんに熱き想いを馳せ、抱える悩みや、新たな決意など、皆様胸の内をオープンにして龍馬さんに綴っていかれます。「この広い海を眺めていたら小さなことで悩んでいたことがばかばかしく思えてきた。気持ち新たに頑張るよ。」同じ思いを抱くお客さまもきっと少なくないはず。訪れるお客様の気持ちを開放的にしてくれるのも龍馬さんの魅力でもあります。一役買っている気がしてなりません。車椅子やベビーカーをご利用の方はスロープからお越しいただけます。記念館にお越しの際は休憩コーナーにも是非お立ち寄りくださいませ。

宮崎 圭子



拜啓 龍馬殿

215通

平成31年3月21日（令和元年6月20日）



『龍馬伝』を見て、高知への転勤を希望し、高知での生活も丸七年になりました。その高知での生活も四月の異動であと一週間となりました。自分なりに龍馬さんを見習って一生懸命何事にも取り組んでまいりましたが、少しは龍馬さんに褒めてもらえるでしょうか。次の異動先でも高知での頑張りと同じように取り組みます。また会いましょう！

（3月21日 徳島 T・T 36歳 男性）



この土佐に生まれて早18年。生まれたこの地から離れる時が来ました。将来の夢を見つけ、それを叶えるために私の船は大海原へと出航します。坂本龍馬の「日本を今一度洗濯し候」と言ったように、私も世のため人のためと、一生懸命頑張ります。

（3月21日 高知 S・M 18歳 女性）



ぼくはさか本りようまんが大すきです。ぼくも、りようまんみたいに、大きなゆめやもくひようをもって、いろんなところやがいこへいつてみたいです。ぼくはしょうらいうちゅうかがくしやにならなくて、いつもよるのほしをながめています。りようまんが大きなうみをながめているように、ぼくもはてしないうちゅうをかんがえながら、夜の星をながめていきます。

（3月21日 高知 Y・K 7歳 男子）



日本はどのように歩んでいけばいいのでしょうか？（あと、素敵な人はどこに居ますか）

（3月22日 埼玉 Y・N 30歳 女性）



全てがかっこよく勇ましい。こういう人間に私もなりたい。見てください龍馬様、私の生き様。

（3月26日 神奈川 A・M 22歳 男性）



ぼくは来たのが2回目です。今日は家族といっしょに車できました。龍馬の残した言葉を一つ覚えしました。われのなすことはわれのみぞしるです。えいぞうなども見れてよかったです。前よりもくわしくなったようなきがします。いつまでもこの場所を残しておいてください。

（3月28日 兵庫 S・N 10歳 男子）



幕末というげきどうの時代をかけた坂本龍馬はともかくよくて、ちようせんする勇氣をもっている人だと改めて思いました。今も昔も人たちがった考え方、何かを変化させようと動くのは簡単なことではないと思います。だからそんななかで時代を変える、日本を変えるためにつごいた龍馬さんの精神や姿は本当にすばらしいものだと思います。何かにちようせんするとき、私は龍馬さんの言葉や姿を思い出しながらちようせんする勇氣をもって行動できたいと思います。

（3月29日 兵庫 A・T 12歳 女子）



念願叶い土佐桂浜に来ることが出来ました。高校三年生の多感な頃に、司馬遼太郎さんの本に出会い、龍馬さんのことを知り、とても大きな影響を受けました。結婚し、子どももでき、家族で土佐高知を楽しみます。生きるかてを与えてくださった龍馬さんに、ただただ感謝です。

（3月30日 東京 H・T 50歳 男性）

ここは館長の部屋

高松 清之

龍馬とダーウィン?!

「生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである。」は、1859年（安政6年、龍馬25歳の時）に、現代生物学の基礎となる「種の起源」を発表したイギリスの自然科学者チャールズ・ダーウィンの言葉である。

記念館の施設や展示が刷新されて一年余。環境の変化に適応して、地域の博物館として期待される機能を発揮できているかどうか、運営に携わるスタッフ一人ひとりが自らに問いかけ、ハード・ソフト両面から点検することを怠れない。

環境や情勢の変化を機敏に読み取り、柔軟に対応すると言えば、頭に浮かぶ龍馬に関しての逸話がある。

それは、大正3年に出版された千頭清臣氏の「坂本 龍馬」で紹介されたもので、「或る日、龍馬途上同志檜垣清治に会ひ、其の長刀を帯ぶるを見て、無用の長物、緩急に応ずる能はざらんと云ひ、自らの短刀を示せしかば檜垣大いに悟る所あり、長刀を棄て短刀を帯び、重ねて龍馬に会ふ。龍馬短銃を執り、轟然一丸を放ちて曰く、是れ西洋の新武器なりと。数句を経て檜垣また龍馬と邂逅す。龍馬曰く『将来は武のみを以て立つべからず、学問が必要なり。僕今や万国公法を読む、頗る面白し』と。龍馬が時勢に適応するもの概ね斯くの如し」というものである。

龍馬の環境変化への適応力と先見性の高さを表すものとして広く知ら

れているが、その後の研究などにより、檜垣は、その時期には、容堂公を警護して江戸へと向かう途中で土佐藩士を誤って殺害した罪で終身禁固刑となり、土佐で投獄されていた（明治6年に赦免）ため、こうした龍馬との出会いはあり得ないとされ、現在では、この話はフィクションとされている。

史実を明らかにしていくことは、博物館や研究者に与えられた大事な使命であるが、こうした龍馬に纏わる興味深い物語が虚構であるとされていくことには、私を含め一抹の寂しさを感じる方も少なくないと思われるが、致し方無い。

なお、この話に登場する檜垣が再び維新の歴史の舞台で取り上げられるのが、西南戦争である。明治10年3月、この戦争で最大の激戦となった田原坂での戦いが終盤に差し掛かうとしていた頃、檜垣直枝（清治）は、政府軍の豊後口警視隊の指揮官として二重峠（阿蘇市）での戦いに臨んだと伝えられている。その後明治27年に没、55歳。龍馬との邂逅が無かったとしても、龍馬が扉を押しあけた維新の激動の中で、様々な変化に適応しながら、逞しく生きた人生であっただろうとの想いが巡る。

 お久しぶりですね！奈良から3ヶ月ぶりに龍馬さんに会いに来ました。この3ヶ月間、高知に行って龍馬さんに会うというのをずっと楽しみにして、日々の勉強や部活を頑張ってきました。学校にも龍馬グッズをいっぱい持って行って、龍馬さんの素晴らしいさやかっことばについて語っているのですが、最近はまだ興味がなさそうだった友人も段々、龍馬さんの良さを理解しはじめ、龍馬さんの話をせがまれるようになってきました（笑）。龍馬さんのでっかい心と柔軟な思想は本当に私の憧れで、いつまでも私の理想の国際人です！大好きです！

(3月31日 奈良 M・Y 16歳 女性)

 龍馬さんが、ゆづきを持って脱藩してくれました。2019年の5月1日から日本は新しい年号に変わります。明治→大正→昭和→平成となりそして「令和」になります。これからも龍馬さんが目指した平和の世の中をつくらせていきたいと思っています。

(4月2日 神奈川 M・T 14歳 女性)

 私はマンガの『おーいー竜馬』を読んでどハマりしました。ここに来ることができて本当に良かったです。展示室で興奮して母に力説しました。とくに私はお龍あてに龍馬が書いた手紙が一通しかなかった、他は焼き捨てられたことにおどろきました。私が一番好きな偉人は坂本龍馬です！また来たいと思います。

(4月6日 岡山 H・O 12歳 女子)

 初めまして。私が貴方を初めて知ったのは小学一年生の頃。教室に置いてあった貴方の伝記を読んでとても好きになりました。身体が弱く、自分に自信がなかった私も、いつか貴方のように強く素敵な人になりたいと思いました。高知に行きたいと憧れ続け、漸くこちらへ来ました。貴方の見

ていた世界に触れることができてとても嬉しく思います。

(4月13日 大阪 S・I 25歳 女性)

 自分も高知の男として、自由、夢、志すべて全力でつらめきとおしたいと思います。この前、龍馬さんが登った高千穂峰に行ってきました。その時、この前述した3つが何となくわかったような気がしました。ゴールにたどりつくまで本当にしんどいけど頂上に立った時、それは幸せなものに変わると理解できました。これからも全力で生きて、途中しんどいことがあっても頂上まで景色が見えるまでがんばろうと思いました。

(4月28日 高知 K・M 23歳 男性)

 りょうまはすごいひとだからおさつにのってほしい。

(4月30日 愛知 T・F 7歳 男子)

 平成から令和になろうとしている今日、やっと長年の夢「竜馬が亡くなった33才に高知に行く！」が実現しました（正確には数えて33才……）。今こうして自由に3人の子ども達と世界中を旅に行くことができるのも、龍馬がそのみちしるべをつくってくれたから。見守っていてください。ありがとうございます。

(4月30日 愛知 H・K 31歳 女性)

 土佐の高知に遊びに来て2日目。桂浜にやってきました。今日から年号は令和に変わります。龍馬さんがこの時代を生きていたら……どんなふうに思っているでしょうね。この令和が戦争のない、生きていて楽しい時代になるよう見守っていてください。この博物館に来て、改めて龍馬さんの凄さを実感しました。

(5月1日 広島 K・O 59歳 男性)

 本日、令和元年五月一日に、この場所に来れて良かったと思います。まさに「日本の夜明けよ」にふさわしい日です。坂本先生が土佐の為に、新しい日本の為にとあつい想いがあっての今だと思っています。私も坂本先生のように、自分のやりたいことを熱意をもっていきたいと思っています。坂本先生は人生の師です。

(5月1日 和歌山 S・S 35歳 女性)

 前略、前日までの雨がうその様に晴天の中、桂浜を訪ねることが出来て幸せです。龍馬殿が生まれ育った土佐に来て、歴史とおいしい食べ物と素晴らしい自然の中、楽しい旅行となりました。明日帰りますが、またいつか龍馬殿の生まれ育った土佐に来たいと思いました。妻と二人の旅行にて。草々

(5月2日 福島 S・T 52歳 男性)

 この前、元号が平成から令和になりました。私は初めてこの記念館に来ました。人がとても多かったですよ。何年経っても坂本さんは大人気ですよーうらやましいです。それと桂浜にも初めて来ました。私は果てがない海というものを初めて見ました。とてもきれいですね。この海の向こうに世界が広がっていると思うとワクワクしますね。ちよつと鳥がうらやましいです。それにしても時代がすぐるのは早いですね。それに比べて人はすぐ死んでしまうので残念です。でもこうかいしないように生きてみせますんで、よかったら見てくださーいね！

(5月4日 愛媛 H・O 13歳 女子)

 NHKの『龍馬伝』を観てからずっとずっとこの坂本龍馬記念館、桂浜に来たかったのですー道に迷った長男にこの広がる海、龍馬の心の広さ、夢の大きさに少しでも触れることができればと思います。たくさんユニークなお手紙楽しく読

ませてもらいました。又かならずきたいです。

(5月4日 兵庫 K・K 48歳 女性)

 半年ぶりの桂浜（まあ年中行事ですが……）。以蔵さんの墓参から武市先生記念館、そして拝啓龍馬殿！皆さんの「志」があったから現在があります。次の世代へその「志」をつないで参りますよーみんなあと一緒に！

(5月11日 岡山 R・F 61歳 男性)

 男のロマン 素敵ぜよ！

(5月22日 愛知 K・K 60歳 男性)

 三十余年前、貴殿に憧れ、県外から高知大学に入學しました。美術の彫塑を学んでいた関係から貴殿の緑青の塗り替えや、貴殿の像を含む群像の心棒を組ませて頂いて光榮でした。在学中は記念館オープン前だと思いましたが、三十年近くを経てようやく訪れることができました。そして当時の想い等をトレースしていくうちに、いろいろな意味で初心に還ることができました。これからも指針で居続けてください。迷う事があればまた会いに来ます。

(5月24日 Y 50歳 男性)

 龍馬さんのことが知りたくて埼玉から来ました。計画力も実行力にも乏しい私が一人旅なんて、と両親も友人も何より私自身も驚いています。一人きりの心細さも初めてのことへの不安も、全て龍馬さんの生まれ育った土佐に行ってみてい！というわくわくが追いついてくれました。私を突き動かしてくれた龍馬さんに感謝です。明日埼玉へ帰ります。桂浜の潮風に吹かれて、一皮も二皮も剥けた私をよお見とおせ！という気持ちでみんなにこじやんと思ひ出話を聞かせるつもりです。きつと次はだれかと一緒に来ますね。

(5月24日 埼玉 M・T 25歳 女性)

■「幕末の志士人気ベスト10」展に集まった声

「投票結果」

総得票数“4418票”

1位	坂本 龍馬	2142票
2位	ジョン万次郎	339票
3位	西郷 隆盛	314票
4位	勝 海舟	262票
5位	高杉 晋作	171票
6位	中岡 慎太郎	163票
7位	土方 歳三	107票
8位	岡田 以蔵	105票
9位	桂 小五郎(木戸 孝允)	72票
10位	吉田 松陰	66票

4月25日から開催している「幕末の志士人気ベスト10」展、それぞれのパネル写真の前で熱心に、また興味深くご覧いただいた皆様からお伺いした、お気に入りや関心のある人物の印象・ご感想を紹介します。

やはり龍馬です。それにしてもみんな若くして亡くなったのですね。(男性)

岡田以蔵の、知られていない闇の部分にとっても興味があります。ただ岡田以蔵の写真がないのは残念です。背格好とか何もわからないんですね？(男性)

ジョン万次郎に関心があります。自分の立場的にジョン万次郎の役割に似ているのではないかと思います。仕事柄、海外に進出したい方をサポートするような事をしていますので。(男性)

やっぱり龍馬でしょう。前向きなところがイイね。テレビの番組表なんか「龍馬」の名前があったら見とうなるもんね。ここへも何回か来たよ。武市は入ってないがやね。時代によっても選ばれる人が違うのかな。(女性)

龍馬が好きです。でもマンガの影響でジョン万次郎も好きです。(男性)

今日龍馬について色々見て来て、これをきっかけに勉強したいと思いました。(男性)

大河ドラマの「龍馬伝」をビデオで最近見て、ここへ来くなりました。龍馬については薩長同盟や大政奉還位しか知らなかったけれど、行動力の有る人物だなと思いました。こういうベスト10のような形で展示が見られると、どんな人物が選ばれているかがよく分かるし、僕は2位になっているジョン万次郎についてもっと知りくなりました。(ご夫婦)

久坂玄瑞です。昔読んだ本の印象で、高杉晋作よりも久坂の方に興味を持ちました。彼のあらぶれない所が好きです。それとジョン万次郎が大河ドラマになればおもしろいものが出来ると思います。(女性)

やっぱり龍馬を見に来ているので龍馬やろう。そんなに歴史には詳しくないけど、武田鉄矢のイメージが強く、まっすぐ前に進んでいくという印象やね。今日は鳥取から連れと来てガイド役です。僕はもう3回目。(男性)

僕は徳川慶喜ですかね、大政奉還をやった。彼の大河ドラマを作って欲しい。私は土方歳三か近藤勇、やはり新選組ですね。五稜郭へも行ったし。(ご夫婦)

武市半平太が入っていないのが残念。僕は愛媛だけど四国の偉人がいいですね。(男性)

僕は家内が歴史好きで一緒に来ただけで、歴史には興味がなくてよくわかんないんです…。(男性)



皆様、率直なご感想・ご協力、ありがとうございました。中村 昌代

入館状況

2019年6月20日現在
(1991年11月15日開館以来 27年218日)
◆総入館者数 4,190,035人
◆グランドオープンまで 3,936,760人
(2017年4月1日～2018年4月20日休館)
■グランドオープン(2018年4月21日)以来 253,275人

編集後記

去る4月21日、当館はリニューアルオープン1周年を迎えました。そして、その後は、新旧の年号をまたいでの怒濤の10連休。館内は大賑わいとなりました。この間、リニューアルオープン直後となった昨年のゴールデンウィーク期間中とほぼ同数のお客様をお迎えすることができました。これが10連休効果だったのかどうかは分かりませんが、幸先の良い2年目のスタートを切ることができ、ひとまず安堵しています。勝負の2年目の思いを抱いて、夏を迎えたいと思います。(た)

館だより“飛 騰”第110号

(年4回発行) 表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日 2019(令和元)年7月1日
発行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休
入館料 一般 490円(企画展開催時 700円)
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

私のテーマ

「龍馬と薩摩藩 近代を切り開いた組織力」



森本 琢磨

筆者が学芸員として勤めている「龍馬の生まれたまち記念館」では、今春、企画展「群像から見る幕末史」に「龍馬と薩摩藩 近代を切り開いた組織力」を開催した。昨年の大河ドラマの記憶も新しい薩摩藩に焦点を当てながら、同藩及び坂本龍馬とその同志たちが明治維新に果たした役割を追う内容である。

幕末と国防思想

明治維新に土佐藩や薩摩藩が貢献したことは周知の事実だが、その際に語られやすいのが、龍馬や西郷隆盛といった「英雄」によって新時代が作られたという史観である。だが、龍馬や西郷も、薩摩藩という巨大な「組織」の存在なくしては活躍の場はなかった。そして、その視点で幕末史を見た時、彼ら以上に注目すべき人物や組織的構造が見えてくる。

幕末という時代を理解するためには、まずは当時の人々が持っていた国防思想に目を向けねばならない。列強の脅威が迫る中、どのような国土を守るのかという意識をこの時期の武士階級は皆持っていたが、その方法論や権力の座を巡って、多くの争いが起きたのである。海に面した薩摩藩では特に国防意識が顕著で、ペリー来航以前から西

洋の技術を取り入れながら、軍事力と科学力を研磨していた。

そして、ペリー来航以後、日本が本格的に「世界」と対峙していかねばならなくなると、薩摩藩は歴史の表舞台に乗り出していく。幕府の衰退は、雄藩勢力の発言力を増加させ、その勢いに乗って同藩は中央政局に影響を持つほどになった。文久二（一八六二）年に薩摩藩主導で実施された「文久の改革」は、その典型である。しかし、この頃の薩摩藩に幕府を倒す意思はなく、むしろその延命路線であった。

同藩が、幕府に警戒を持ち始めたのは、元治元（一八六四）年の第一次長州征討の頃からである。その背景には、「長州の次は、薩摩が幕府に狙われる番ではないか」との不安を藩上層部が持ったことにあった。幕府延命から「抗幕（幕府に對抗する）」へと舵を切った同藩は、そのために長州藩と連合することを選択する。そして、近代海軍の技術を持つ龍馬らを取り込み、薩長連合（薩長同盟）プロジェクトの翼を担わせた。

薩長連合と大政奉還

薩長連合は龍馬のアイデアではなく、あくまで薩摩藩主導で進められた。そして、その中心的人物は、国父・島津久光と家老・小松帯刀であった。薩長間を経済的取引で結ばせることで融和を促したというプランも、双方の要求から始

まったものであり、龍馬の発案ではない。だが、このプロジェクトにおいて縦横無尽の行動力と交渉能力を発揮した龍馬の功績は、決して色あせることはないだろう。

また、プロジェクトの最終局面となる「艦船を薩摩名義で買い、それを長州に渡す」という計画を成功に導いたのは、龍馬の同志・近藤長次郎であった。薩長上層部の長次郎に対する信頼度は高く、長州藩主から薩摩藩主に宛てた親書内の「詳細は、長次郎に聞いてください」という旨の記述は、それを証明している。

こうして慶応二（一八六六）年二月、薩長連合は締結に至るが、両藩ともこの時点では、「倒幕」までは考えていなかったようだ。しかし、翌年五月に行われた「四侯会議」以来、薩摩藩は将軍・徳川慶喜を警

戒し、武力も辞さない「討幕」路線へと踏み出していくこととなる。以後、薩摩藩は「武力討幕派」との分類をされることがあるが、事はそう単純ではない。薩摩藩は、武力の選択肢を持ちつつも、できるだけ血を流さない方法論を模索しながら大政奉還策を進めていたことは、もっと周知されねばならないだろう。

本稿は、決して筆者の実績に基づくものではなく、町田明広・神田外語大学准教授をはじめ研究者の方々が積み重ねた成果をもとに記述した。幕末の薩摩藩研究は、近年、玉里島津家史料群が公開されたことで、「まさにこれから」の局面が強い分野である。研究者の方々に敬意を持ち、その成果から謙虚に学んでいく姿勢を忘れないようにしたい。



小松帯刀像（鹿児島市）

テーマ

「龍馬の生きた時代を考える」

今年の「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」は5月25日(土)、龍馬記念館のホールにおいて第11回大会を開催した。

来賓の高知県文化生活スポーツ部の橋口欣二部長様、高知市教育委員会の高岡幸史教育次長様から、設立10周年の節目を迎えた本会への期待を込めたご祝辞をいただいた。

特別講演には、京都国立博物館の宮川禎一様をお招きし、「寺田屋登勢と坂本龍馬」登勢の手紙の真意」と題して深い考察をもとにした研究が発表された。つまり、薩長同盟を成し遂げた龍馬が幕府側に襲撃された寺田屋事件は、龍馬の思惑を超えるほどの成果であったに違いないというものである。



会員による研究発表は、左頁の通り、今井章博氏の「龍馬15年忌祭をめぐる元海援隊士達の動向」、佐竹敏彦氏の「龍馬のここを伝えたい」、広井護氏の「龍馬がゆく」のスリルとサスペンス」、亀尾美香氏の「岡崎菊右衛門日記にみる幕末」の興味深いものとなった。詳細は本学会の発行する「論集」をお目通しいただきたいと考えている。

今年は72名の参加であったが、来年の再会を誓い合つて「宣言」の発表となった。

宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、平成二十一年四月の発足から十年を経過し、県内外から七十一人が参加して第十一回研究発表会を開いた。テーマは「龍馬の生きた時代を考える」。社会のさまざまな場面で新しいことと旧態依然とした姿が交錯する中、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

特別講演は京都国立博物館の宮川禎一さん。他に、県内の四人の研究家が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。坂本龍馬記念館のクレドアップとともに、県下至る所で龍馬の掲示が見られるようになってきた。ただ、子どもたちにとれくらく龍馬のことが正しく届いているのだろうか。龍馬が通つて一五二年。戊辰戦争終結から一五〇年。私たちは龍馬の生きた激動と変革の時代に学びつ、子どもたちにも龍馬の生き方を語りながら、悔いの残らない道を確実に歩んでいきたいと思います。

二〇一九年五月二十五日

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



寺田屋登勢と坂本龍馬 一登勢の手紙の真意一

京都国立博物館 上席研究員 宮川 禎一 氏



本講演の主となるのは、慶応二(一八六六)年三月頃の「坂本龍馬宛て寺田屋登勢の手紙」である。この手紙は、薩長同盟直後に寺田屋で伏見奉行所の襲撃を受け、上手く逃げおおせた龍馬に対して書かれたもので、宮川氏は、この文章に「何かの気配」を感じたそう。

今回の龍馬学会では、最後の発表者である広井護氏が「龍馬がゆく」の深層読みについて発表なされた。広井氏曰く、「違和感のある文章には、必ず作者の意図がある」そうだが、お登勢の手紙は違和感だらけである。学会最初の特

別講演と、最後の発表がリンクしており、大変興味深く拝聴した。まず、宮川氏が注目したのは、お登勢の文章力である。「事件の光景が眼前に浮かぶような文章の力。表現の巧みに注目すべきだ。幕末にこんな手紙を書いた女性がいかに驚く」と。さらに「寺田屋のことを『ある宿』とか、体験したことを『よそで聞いた咄』だとか、伝聞として記すところが『秘密の通信』らしく面白い」ともおっしゃられた。確かに非常に面白い文章で、お登勢の教養の高さとセンスの良さを感じる。

最後の署名も「お登勢」などと書かず、「血ノ葉ノ存知」となっているのも面白い。お登勢は、龍馬らが逃げた後、二階に上がり「それからどうぞして品物をかくさんと思ひ候へども

思うにまかせず」と書いており、龍馬の大事な書類が奪われたことを報告している。これによって、薩長同盟のことが幕府方や諸藩に知られてしまった。

宮川氏は、書類が奪われることについて、実は龍馬がお登勢を相棒にして仕組んだ謀略ではないかと推測されている。奪われ方は想定外(つまり盗みに来ることを想定)ではあったが、予定通り奪われたので、作戦の成功を報告したのがこの手紙である、ということだ。

確かに、この手紙はおかしい。なぜ宿の女将が「品物をかくさん」とするの。奉行所役人に見られてはいけない物を龍馬が持っている、とお登勢は知っていたことになる。しかも、普通であれば、龍馬が持つて逃げるか、火鉢で燃やして処分するべき重要文書を、置いていったことも知つていて、二階へ上るのだ。宮川氏はこの行動を、お登勢の芝居ではないかと推測している。

龍馬とお登勢の謀略の目的は、薩長同盟の情報リークではないか、というのが宮川氏の見立てである。長州藩と手を結ぶことについて、薩摩藩内には反対派も存在した。しかし、世間にも幕府にも薩長同盟が知れ渡れば、薩摩藩は後戻りできなくなる。それを見越しての謀略ということだ。

この説の証明は難しいが、非常に興味深い推測であり、示唆に富むものだった。今後、「違和感のある文章」に行き当たれば、その先に隠された真意を読み解く必要性を教えていただいた。

特別講演

岡崎菊右衛門日記に見る幕末 —参勤・江戸詰の記録を中心に—



高知県立坂本龍馬記念館
主任学芸員

亀尾 美香

平成二十八年度に寄贈を受けた岡崎家文書のうち、幕末の日記五点（嘉永四年～安政六年）を中心に考察した。岡崎菊右衛門は土佐藩士（軽格）で、藩主の参勤に何度も随従している。主に豊信（容堂）への随従を中心に六回の参勤記録を調べたところ、土佐から江戸までは二十五～三十二日の旅程、中山道を通った二回以外は東海道を通行していた。菊右衛門日記には参勤の旅の様子のほか、江戸詰の勤務や生活、供をする藩主の行動なども詳細に書かれており、極めて貴重な記録といえる。

また、日記の安政元年四月部分には、菊右衛門が坂本龍馬から「ヒス銃打方詞遣小冊」を借りたという記述がある。江戸滞在中の龍馬と接点があった点も去ることながら、龍馬と砲術との関わりを示す初期の記録として注目すべきである。

坂本龍馬十五年忌祭をめぐる元海援隊士の動向 —県立坂本龍馬記念館所蔵坂本直宛書簡集より—



高知近代史研究会会長・
土佐史談会副会長

今井 章博

平成二十九年度、安田町まちなみ交流館「和」で開催した企画展「其の後の海援隊士たち」で、県立坂本龍馬記念館が寄贈を受けた坂本直宛書簡を数点借用し、展示した。その中に、高知県知事も務めた丸岡莞爾が直に宛てた坂本龍馬十五年忌祭への欠席届があった。

十五年忌祭は、三吉慎蔵や土方久元の日記を見ると十二月十八日に執り行われたことが明記されている。また、佐佐木高行や勝海舟の日記にも関連の事項が記されている。

これらの記録から出席した人やできなかった人が見えてくる。元海援隊士らが、維新を経て、どのような変遷があったのか、この十五年忌祭を通して浮かび上がる諸相を紹介した。

「龍馬のころを伝えたい」



龍馬脱藩祭代表

佐竹 敏彦

龍馬生誕二五〇年の昭和六〇年に、たまたま、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んだ。すると、第二巻「風雲篇」に和霊神社が出てきた。脱藩前に立ち寄った竜馬が、先祖の霊と和霊さんの神霊に呼びかける場面である。

高知市神田高神に居を構えて以来、誘われるがままに地元神々の氏子になり、奉納活動に参加してきた。その神社が坂本龍馬の脱藩に大いに関わりがあったのである。

すぐに事実関係を調査し、県内に残る数少ない龍馬関連の史跡だと把握した。

脱藩してまで国のために奔走した「龍馬のころ」を子どもたちに伝えるため、昭和六〇年から毎年、龍馬が脱藩した三月二十四日を中心に「龍馬脱藩祭」を開催している。

「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」



土佐中高等学校
国語教師

広井 護

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の総発行部数は、すでに二千五百万部を超えたと言われている。「永遠のベストセラー」と言っても過言ではない。ところが意外なことに、文学作品としてはほとんど論じられていない。

今回の研究発表では、竜馬と西郷が初めて出会う場面である「鈴虫の場面」と「竜馬暗殺の場面」を取り上げて、深層読みを行った。深層読みとは、表層読みと対になるものである。表層の読みは、一見して読み取れるもので、深層の読みは、作者が文中に仕掛けたものを分析し、深く読み解いていく方法。文章の中で違和感のある言葉には、必ず作者の意図が込められており、それを読み解く楽しさを紹介した。

福沢諭吉が嫌い

宮川 禎一

福沢諭吉は大分県中津市に旧居があるので、中津南高校出身の筆者がヒイキする偉人だ。数年後に一万円札から引退されるというので、ここに一文を書いて置きたい。明治日本の近代化は『西洋事情』や『学問ノススメ』や『文明論之概略』など福沢先生の膨大な著作を通じて進んだと言つて良い。しかし中津市の福沢諭吉記念館の方に何うと、新紙幣の話が出るずっと前から、記念館に「お札はもうすぐ福沢じゃなくなるのだよね」とか嫌がらせ風の電話がほぼつづつあったそうで「なんで福沢先生は嫌われているのか？」とちょっと気になった。

「福沢諭吉が嫌い」の根底には、この世の中には一定程度「他者が勉強して知恵が付くことを嫌う人間の存在」があるからだと思う。「人間は勉強してこそ文明化する」とは福沢先生の終生変わらぬ主張だが、「人は無知で愚昧の方が都合良い」と考える個人やシステムはいつの時代もどこにでも存在するのだ。その方面からすれば「学問をして賢くなつて一身独立して自尊しなさい」や「個人の独立のちに国家の独立がある」や「人は賢くなつてこそ上下無し」などという福沢諭吉は永遠の敵であらう。学問をせず、批判精神に乏しい人間は騙しやすいし、支配もしやすい。人に上下もあるべきだ。その方が良いと思う人やシステムが福沢諭吉を攻撃しているらしい。

一万円札の肖像が教育を勧めた福沢諭吉から近代経済の祖渋沢栄一へと転換するベースには「勉強ばかりして、口うるさく批判するよりも、黙ってちゃんと働いて日本経済に貢献しろよ」という経済界や財務省の思惑があるのであろう。福沢諭吉は口が悪く、喧嘩上等のスタンスなのでこんなことを言いそうだ。没後百二十年近くを経ても嫌われるとは(現代にも意味があるということ) 福沢先生の偉大さを良く示していると思う。



福沢諭吉旧居記念館 中津市留守居町

コラム・龍馬のこと

「天才？」

江上 英治

現代龍馬学会で二度の発表を頂いた窪内隆起氏は、元産経新聞で司馬遼太郎の担当記者です。最初の発表が大面白く興味深かったので、森前館長に懇願したところ、窪内氏にも快くご承諾頂きました。何しろ担当記者というのは付き人みたいなもので、普段の生活や仕事ぶりをご存知故に、リアルに話して頂けます。「竜馬がゆく」執筆にあたり、3000冊に及ぶ資料本を購入読破されたそうです。これらを読み終えるには、毎日1冊読んだとしても8年かかります。ホンマかいな！と話を聞くうちに納得しました。実は、司馬先生は速読の達人だったのです。2ページ読むのに1分とかからず、1~2時間あれば1冊読み終える計算になります。そんな凄い司馬先生も、生活面ではなんとも笑える微笑ましい行動があるそうで、ある時、窪内氏がクルマで出迎えに行ったところ、ソックスが左右バラバラ！冬場に迎えに行った時のこと、随分とズボンが膨らんでいたの、『先生！下に何か履いていませんか？』すると、下ろしたズボンから股引きが出てきたそう。野暮な質問をしたところで、『そんなもんでもういい。』と一喝されそう。さすが天才は遙か先を見据えておいでです。

第3回「龍馬のひろば」 原稿募集！

お待たせしました。第3回「龍馬のひろば」は、みなさんが愛読されている司馬遼太郎先生の「竜馬がゆく」に焦点化してみたいと思います。

今年の第11回現代龍馬学会(5月25日開催)においては、広井護先生の『『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス』も発表され、参加者が領きながら、広井先生の世界に浸ったことでした。

本会に集うみなさんは、きっと何度も「竜馬がゆく」を読んでいることでしょう。そこで「私は、ここがスキ！」という思いや「この文章で、龍馬に惚れた」ということなどを発表しあってみましょう。

今回はハガキではなく事務局へのメールが郵送ということにします。字数制限は、今までは200字でしたが、今回は200字を超えてもいいことにします。締め切りは、11月15日。(あまり長すぎる時には、少しカットがあるかも…。)